

## 晩年期における原崎秀司の視座と実践について

—日本赤十字社長野県支部事務局長時代を中心として—

○ 帝京平成大学 中 瀧 洋 (5048)

キーワード：日本赤十字社長野県支部，原崎秀司，思想研究

### 1. 研究目的

1938（昭和 13）年の旧厚生省への入省以降，方面事業及びホームヘルプ事業の推進を中心とした経歴を重ねた原崎秀司（1903.8.5～1966.9.12，以下，原崎）は，最後の職場として，1961（昭和 36）年 5 月～1966（昭和 41）年 9 月までの約 5 年間，日本赤十字社（以下，日赤）長野県支部に勤め，63 年間の生涯を全うしている．しかし，森（1972:31;1974:3），竹内（1974:52），上村（1997:249）らの先行研究でも彼の晩年期は詳解されていない．彼の生涯は，学生時代，旧厚生省勤務時代，ハウスキーパーを着想した戦前期，欧米視察時，晩年期の 5 つに大別できるが，欧米視察（1953.9～1954.5）までに終始し，その後の 1960 年代を中心とした晩年期の解明を抜きにして，原崎思想の研究の完遂はあり得ない．

本発表の目的は，ホームヘルプ事業の先覚者である原崎の晩年期に焦点を当て，彼直筆の日誌『自由日記 横書』（1960.7.20-1966.6.13）が記された 1960 年代を中心に，彼の思想展開並びに実践活動を実証的に考察することにある．この解明により，事業・制度の展開とともに，その背後のあった原崎の苦悩や迷いを含む生活実態，思想形成を浮き彫りにし，その今日的意義を考究する．以下，当日の発表では，Ⅱでは日赤長野県支部事務局長時代を整理し，Ⅲでは彼が抱いた使命感や志向した幸福論を考究し，Ⅳでは晩年期において目覚めた分野や自らに課した課題を検討し，Ⅴでは心を大切にした晩年の原崎思想と闘病生活を具体的に論考し，最後にⅥでは原崎思想の到達点と今日的意義を考察する．

### 2. 研究の視点および方法

原崎は晩年期に，日赤活動や趣味活動を通じ，思想を展開させ，社会福祉界に何らかの思想的影響を与えていたとするのが本発表の視点である．その実証的裏づけを試みるべく，掘り起し作業の基本素材となるのが，原崎直筆の 4 冊の日誌（『母子日記』『遠保栄我記 新正堂版』『歌稿 第一輯』『自由日記 横書』）である．これらの第一次資料を紐解き，彼の日々の生活感情や論理的思考への着目を通じ，福祉思想の形成基盤を知る手がかりを得る．

### 3. 倫理的配慮

本発表では『日本社会福祉学会研究倫理規程』に基づき，原崎直筆の日誌の使用許可を，原崎の長男である原崎修一氏（2009 年 8 月 3 日）及び次女的美谷島和子氏（2014 年 1 月 7

日) から得ることで倫理的に配慮した。

#### 4. 研究結果

従来、母子福祉や高齢者福祉分野のなかでホームヘルプ事業を創設したことが脚光を浴びてきたが、実際には障害者福祉や人生観などの領域にも原崎は関わっていた。時代の推移のなかで身を転じ、必要性に基づき行動・実践へと駆り立てたものは何であったか。そこには、若年期から短歌や日誌を認めていた習慣や創造性があった。日赤人としても歌人としても十分な自信がなかった原崎が出会った書籍が、ヒルティの『幸福論』であり、太田和彦の『人生観・世界観の話』であった。前者からは「欠陥ゆえに愛することができる」という人間像や「謙譲のこころ」といった徳を習得し(=斎藤 1958:98-371)、後者からは『自分の短歌』ということを考える。そのことは自分の人生観ということでもあるだろう」と記述し、創作活動の集大成を人生観と同一視し、人生の熟考を介し、物事を正しく捉える観察眼を養うことを重視している。加えて、点訳講習会参加者や九州合同奉仕団大会参加者との出会いが、彼に過去をさらに深く省察する機会を与え、人生や奉仕の意義を再考させた。教育活動を通じ、社会の真の価値と生きがいの重要性を悟った。

#### 5. 考察

以下、2点を考察する。第1に、母子福祉・高齢者福祉分野におけるホームヘルプ事業の先覚という、森(1972:31;1974:3)らの指摘を障害者福祉分野における観点から捉え直すと、必ずしもその通説が当てはまるわけではない。もっとも、従来、障害者福祉領域における原崎の功労は等閑視されてきた。こうした齟齬の背景には、「何を歴史の連続性といい、何を断絶というのかも、視野の広狭によって認識は異なる」という社会福祉理論・研究が陥りやすい危険性が存在する(吉田・岡田 2000:208)。先人の功績が大きく、センセーショナルであればあるほどその危険性は高まるため、より慎重な姿勢を要する。社会福祉研究者は連続と断絶の双方を捉える複眼的視点と時間に関わる経年変化への眼差しが不可欠である。第2に、欧米視察のみならず、日赤活動、短歌創作、教育活動など、幅広く活躍していた原崎だが、それらは進んだ諸外国の制度・事業の仕組みや巧みな表現力・技法などといった、単なる技術面の習得に終始していたわけではなく、進んだ考え方や優れた先人の生き方を学び取るものであったということである。彼にとって、短歌の師、山崎等は歌人の先輩の域を超え、人生の先輩という畏敬の念に達していた。

先人の生き方や先例を通じ、各人の希望を創出する力の源泉となることこそが、本来、社会福祉の思想を学ぶことであり、歴史研究の果たすべき役割ではないだろうか。社会福祉分野において、今後一層、人々の自立支援を強調するなら、何かを学ぶというよりも学び方や生き方そのものを学ぶことこそ、現代日本社会における社会福祉関係者たちに課せられた今日的な命題と考える。